

平成 30 年度 東山会会報



名古屋大学工学部機械系学科同窓会 東山会 平成 30 年 12 月発行

【目 次】

●会長からの便り	昭和 48 年卒業 (第 32 回)	土屋総二郎 会長	P1~2
●特別寄稿		福田 敏男 教授	P3~6
●新任・着任の先生の挨拶		奥村 大 准教授	P7~8
		東 直輝 助教	P9
●会員からの便り	昭和 53 年卒業 (第 37 回)	酒井 康彦 教授	P10~11
	昭和 63 年卒業 (第 47 回)	水野 努 氏	P12
	昭和 63 年卒業 (第 47 回)	辻 義之 教授	P13~15
	平成 6 年卒業 (第 53 回)	松野 隆幸 准教授	P16
	平成 20 年卒業 (第 67 回)	村島 基之 助教	P17~18
●平成 30 年東山会新年同窓会の報告		長谷川泰久 教授	P19~21
●第 18 回東山会イブニングサロン開催報告		山田 陽滋 教授	P22~25
●学内近況		秦 誠一 教授	P26~27
●掲載原稿募集 (同期会等の報告)			P28

会長からの便り

東山会 会長

土屋 総二郎

昭和 48 年卒業(第 32 回)



会長からの便り

平成 28、29 年度に引き続き、平成 30、31 年度も会長を務めさせていただくことになりました。微力ながら、副会長や理事の方々、そして事務局の皆様とともに東山会の運用や発展に努めてまいります。

平成 28、29 年度を振り返りますと、平成 30 年 1 月 27 日に恒例の東山会新年同窓会を開催いたしました。開催にあたっては、さらに多くの会員、特に若い会員の参加の増大に向けて理事会でいろいろと議論されました。場所についても、会員皆様の思い出深い名古屋大学での開催が良いのではないかとか、時期も名大祭やホームカミングデーに合わせた時期がどうか、などがありました。一方、東山会新年同窓会は、開催を重ねてきた歴史や伝統の重さ、そして利便性の良さなどを理事会の皆様も十分理解しており、もう少し継続した議論が必要であろうということから、今回は、従来通り 1 月に名古屋駅前の名鉄ニューグランドホテルでの開催となりました。

関東支部、関西支部におかれましては、平成 28、29 年度ともに支部総会が開催され、私も参加させていただきました。総会以外にも、ゴルフや囲碁の会、フォーラムなども開催されており、支部のまとまりの良さを生かした活動がなされています。

イブニングサロンにつきましては、昨今話題を中心に会員皆様の関心の高いテーマで開催されました。平成 28 年 7 月には、「IoT を活用した工場見える化」というテーマで IoT についてテクノツリー様からお話をいただきましたし、同年 12 月には、「鉄道の安全安定輸送」というテーマで、JR 東海様から新幹線やその後のリニアについてお話をいただきました。平成 29 年 12 月には、「最近の空と地上移動体開発」というテーマでキャリオ技研様からドローンについてのお話と、加えて三菱自動車様から「昨今の自動車電動化と今後の課題」というテーマで、広い視点からの EV, HV など自動車の変革についてのお話をさせていただきました。いずれも、第一線でご活躍されている方々からのお話で、同窓会関連行事ならで

はの一步踏み込んだ内容で、私も含め参加された方々一同大変興味深く聞かせていただきました。会員の皆様におかれましては、ご都合のつく折にはぜひイベントに参加されることをお勧めいたします。

東山会の母体である名古屋大学工学部機械系学科・大学院機械系専攻は、平成29年4月よりの名古屋大学の改組に伴い、その組織、構成が大きく変わりました。従来は機械系学部の3年生、4年生は、機械システム工学、電子機械工学、航空宇宙工学の3つのコースに分かれていましたが、今回の改組の関係でそのコース別が廃止され、同一の教育を受けた機械・航空宇宙工学科の卒業生として卒業することになります。この改組に伴い、従来の機械系同窓会「東山会」、電子機械同窓会「伊吹会」、航空系同窓会「高翔会」の各同窓会で、将来に向けた同窓会の在り方についての議論が始まっています。東山会でも、それぞれの同窓会の歴史や伝統を尊重しながら、今後の同窓会のより良き姿を求めて議論を進めていきたいと思っております。

東山会は、会員の皆様、幹事の方々や、事務局、大学の関係者など、多くの方々により支えられています。今後とも皆様の、多大なご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

名古屋大学名誉教授
名城大学工学部メカトロニクス工学科教授
北京理工大学教授

福田 敏男



名古屋大学を2013年退職し、6年目を迎えます。退職後は名城大学工学部メカトロニクス工学科・北京理工大学に在籍、引き続き研究に邁進して参りました。IEEE R10 Director として2013-2014年、IEEE Division X Director として2017-2018年務め、2015年秋には紫綬褒章受章の誉れに預かりました。また、日中共同研究を精力的に進め、2014年に中国政府より友誼賞を受賞し、2017年に中国科学院アカデミー会員に選出されました。

2018年は年初よりIEEE（米国電気電子技術協会）President-Elect2019に立候補すべく、多くの方々のご支援・ご協力の下、活動してまいり、日本のIEEE支部創設以来過去60年、アジア人として初の立候補、そして当選を得る事が叶いました。IEEEの43万人の会員のために、会員皆さんと一緒にIEEEのさらなる価値を創造・増進するとともに、次の人が後を続けて参画できるように枠組みやヒューマンネットワークの構築などに、さらなる貢献する予定です。

1988年、38歳の時、初代実行委員長として330名の参加者で創設スタートしたIEEEの主催の国際会議、Intelligent Robots and Systems (IROS)も、2018年の今年 Madrid で3700名の参加者でロボット分野の大きな会議に成長しました。スペイン国王のオープニングスピーチや数多くのロボット展示を目にして、恩師や初期の運営の苦労を共にした友人たちとともに会議のダイナミズムを感じました。その他、10以上内外にいろいろな会議を創設したおかげで、それぞれを回っていくだけで、追いつけずいます。

「人生100年」といわれる時代、今年古希を迎えますが、健康に留意しつつ、生涯現役を目標に引き続き、研究・社会貢献に努めて参りたいと思います。研究室より今年100人目の博士課程修了者を輩出致しました。アカデミアに進んだ世界中の卒業生の研究室を時折訪問、滞在するだけで、時間が過ぎていきますが、現在も以下の研究に引き続き取り組んでおります。

Viva la Vida!!!

1. インフラ構造物点検のためのロボット

本研究ではインフラ構造物の点検のため、UAV (Unmanned aerial vehicle) を用いた打音や目視点検用のロボットを作製、研究中です。ドローンに多自由度のロボットマニピュレータを搭載して、飛行の安定性、マニピュレータの位置決め制御、マニピュレータの壁への押し付け力制御、打音装置の製作と打音信号処理、SLAM を用いた Navigation、自律飛行、自律点検データベースとマネジメントシステム等について、基礎と応用研究をしています。

2. 凹凸面対応型濡れ性を有する吸着パッド

かたつむり等の Bioinspired Robotics の研究の一環として、濡れ性を用いて、通常のパッドではできない凹凸面での吸着を実現する吸着パッドのソフトロボット研究を行っています。濡れ性をマイクロ技術を用いて、毛細現象を利用した SWA (Super Wet Adsorption) として提案しました。これは、毛細管とポーラス部から構成されており、吸引時に水を徐々に排出することで、真空崩壊を防ぎ従来のパッドでは吸着できない凹凸面の吸着を実現しています。このパッドを装着したロボットにより従来吸着が難しかった、凹凸面や錆やほこりが付着した面を安定に吸着できるパッドを実現し、凹凸面を有する物体 (工業製品、農産物等) の把持ハンドやグripper、凹凸壁面移行ロボット等に応用できます。

3. 歩行補助のための杖型ロボット

本研究では、高齢者やリハビリテーション患者の為の歩行補助を行う杖型のロボットについて、操作者の姿勢から転倒し易い歩行パターンを検知し、転倒を事前に予想して予防する研究を行っています。転倒し易い歩行パターンとして、タンデムスタンスによる転倒を、力センサ、レーザ計測器を用いて計測して予測し、転倒を予防することを実現し、臨床試験を実施し、ロボットの評価を行っています。また、さらに軽量化、小型化することで、より扱いを簡便にした倒立振り子型の杖ロボットにより、リハビリテーション患者の体力トレーニングや社会復帰を補助する研究を行っています。

4. ヒューマン-マシン協調型ロボティクス

本研究では、人間の行う作業を支援し、人とロボットのそれぞれの有する優位性を生かしたヒューマン-マシン協調型ロボティクスの実現を目指しています。人間がロボット (機械) に合わせるのではなく、ロボットが人間に適応していくためには、ロボットが人間の意図を推定し、人間の動きに合わせた適切な動作を実現する必要があります。近年では、自律型のコンパニオンロボット、やサービスロボットの研究をしています。

5. マイクロロボット、マイクロメカトロニクス

本研究では、髪の毛程の小さなモータを作る技術を用いて、微小領域の物理現象を考慮してマイクロアクチュエータやマイクロマニピュレータの設計、試作及び解析、そして、制御に関する研究を行なっています。これまでに細径のパイプ中

を移動するマイクロ移動ロボットや、多自由度マイクロマニピュレータの開発を行ないました。また、ロボットグリッパやロボット用スキンとしての使用を目的に、圧電材料を用いたマイクロ触覚センサ及び集積が技術について研究を行っております。毎年開催されるマイクロ・ナノメカトロニクスとヒューマンサイエンスの国際シンポジウム (MHS) は、2018年に第29回を迎えます。

6. バイオマイクロマニピュレーションシステム

本研究では、生物細胞のような微小な物体を操作するためのマニピュレーションシステムに関して研究を行っています。生物細胞や更に小さいDNAなどは接触プローブ型マニピュレータによって直接操作することは困難であると同時に操作対象を破壊してしまう恐れがあります。そこで、本研究では静電場・磁場・流体場・光場などを制御し、非接触と接触操作を併用した、非破壊・低侵襲なバイオマイクロマニピュレーションシステムの構築を目指しています。また、マイクロ・ナノピペットなどを用いたマイクロマニピュレーション技術とマイクロチップ技術を併用することにより、単一の微小な細胞を自在に操り、効率的かつ高度な操作・計測技術への応用を目指しています。近年では、線虫の走化成を利用し、マイクロチャンネル内で特定の化学物質の有無や濃度の識別に成功しています。また、3次元細胞システムを構築するため、各種の方法を提案しています。特に磁力により磁性細胞内包ファイバーを操作することにより、3Dの細胞構造組み立てを実現するバイオアセンブリー技術やさらに、将来のCyborgやBionicシステムの研究を提案し進めています。

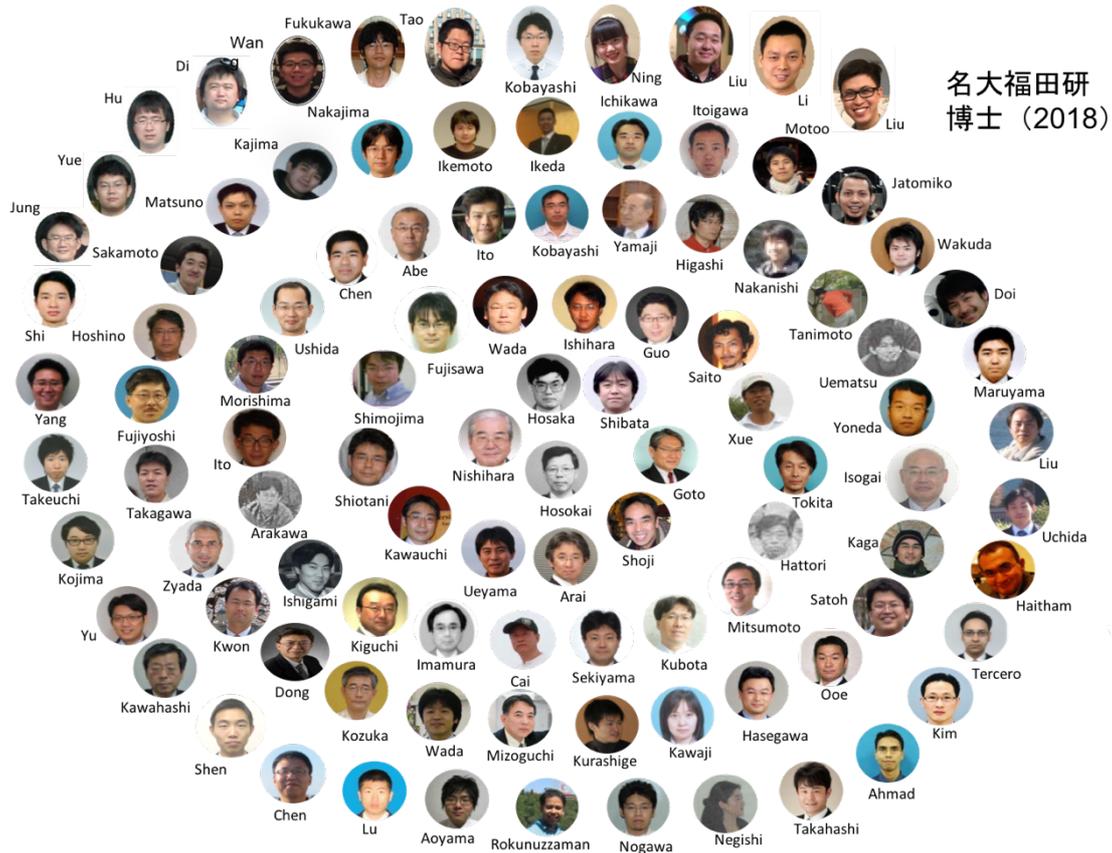
7. ナノマニピュレーションシステムに基づいたナノラボラトリ

本研究では、マイクロレベルからナノレベルまで、実験解析に基づいた理論と応用に関して研究を行っています。電子顕微鏡下でのナノマニピュレーションシステムに基づいたナノ計測、ナノ加工、ナノ組立てを実現した“ナノラボラトリ”を構築し、これまでは実現が困難であったマイクロ・ナノデバイス創製を目指しています。環境制御型電子顕微鏡(E-SEM)内でのナノマニピュレーションシステムを構築し、実時間・3次元環境下において、ナノバイオやナノ材料の加工・計測・組み立てを行うことが可能で、真空状態ではなく、湿潤状態にて、細胞の計測・操作システムを構築しています。これまで例えば、ナノプローブを用いて、細胞の生死状態や活性に関係した単一細胞の局所的な機械的・電気的な特性評価に成功しています。

8. 血管内脳外科手術のための医用トレーニング・支援用システム

本研究は、医師が手術などを行う際のトレーニング・支援するシステムの開発を目的としています。血管内脳外科手術用カテーテルを用いた低侵襲手術における操作支援と血管内情報の提示に関して遠隔操作ならびに脳下垂体腫瘍のための手術シミュレータの作成を行っております。CTやMRIの画像から、患者個人個人の脳血管形状を3次的に再構築し、それをマイクロ3次元造形された同透明立体モデルEVEは、医師の訓練や技術評価を目的としたマイクロ手術のシミュレーショ

ンの他、患者のインフォームドコンセント等に使用可能です。近年では、生分解性材料による3次元人工血管足場を作製し、実際の血管の多層構造の実現や、フラクタル構造を有する Stent や Flow Diverter を新たに考案し、それをを用いた血管治療の応用研究を展開しています。また、脳のモデルを作成するとともに、脳下垂体腫瘍手術の硬膜モデルの作成と評価や手術の技巧技量の評価を行っています。



名大福田研
博士 (2018)

着任挨拶

名古屋大学大学院工学研究科
機械システム工学専攻
機械理工学講座
固体力学研究グループ

奥村 大 准教授

平成 10 年卒業(第 57 回)



2018年4月1日付で機械システム工学専攻の固体力学研究グループに准教授として着任しました。とは申しましても、2016年3月まで名古屋大学の計算理工学専攻に在籍しており、計算固体力学グループ 大野信忠教授のご退職を受け、2016年度から2年間、大阪大学大学院工学研究科に転出していました。四大学工学系人材交流プログラム（現在は六大学）という制度の下での転出で、形式上は名大を退職し、阪大での任期付きの採用、2年後に阪大を退職し、再び名大での新規採用となります。

当時、妻は名古屋で育休中、復職に向けて息子は保育園に入園することが決まっておりましたので、大阪大学吹田キャンパスの近くにアパートを借り、単身赴任しました。この2年間は、名古屋大学の研究室にも院生がおりましたので、主に週中を阪大で過ごし、研究教育活動を行い、週末をはさんで名古屋に戻り、名大の院生の研究指導を行いました。移動に便利な場所ということで、偶然、茨木春日丘教会（建築家 安藤忠雄氏が設計した「光の教会」として有名）が見えるところに住むことになりました。このエリアは松沢池と呼ばれる江戸時代に造られた人工池とそれに付随する春日丘公園を中心にして、起伏のある土地柄ながらも閑静な住宅街を形成しており、徒歩数分で茨木カントリー倶楽部という大阪府最古のゴルフ場に行くこともできます。吹田キャンパスには徒歩15分、近くのバス停から茨木駅にも15分程度で行くことができ、茨木駅からは新大阪や京都にも出ることができるなかなか便利な場所でした。私はゴルフをしません、読書をするので、すこし足を延ばして司馬遼太郎記念館に行きました。途中には焼肉で有名な鶴橋というディープなエリアがあります。さらに足を延ばして高野山にも行って見たかったのですが、これは次の機会に達成したいと思います。

大阪大学では、澁谷陽二先生の研究室でお世話になりました。大阪大学は「地域に生き世界に伸びる」をモットーとしています。「自由闊達」という言葉は名古屋大学を説明するために使われますが、澁谷研究室では、固体力学研究の進むべき方向について、まさに自由闊達な議論が行われており、この2年間は、私自身、

今後の研究教育活動に思いを巡らせるまたとない期間となりました。私の将来のかけがえのない財産になるのだと感じています。このような貴重な機会を頂きまして、機械・航空宇宙工学科の先生方には大変感謝しております。

東山会では平成16～19年度,22～25年度に会計理事を担当させて頂きました。東山改革のときには、庶務理事の社本英二先生とエクセルシートに数字を打ち込み、財政改革について検討したことが懐かしく思い出されます。再び東山会で皆様とお会いできることを楽しみにしております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

新任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
マイクロ・ナノ機械理工学専攻
マイクロナノ機械科学講座
ナノ計測工学研究グループ

東 直輝 助教

平成 28 年卒業(修 62 回)



平成 30 年 4 月 1 日よりマイクロ・ナノ機械理工学専攻、マイクロナノ機械科学講座の福澤研究室の助教に着任いたしました東 直輝と申します。私は、同大学の工学部機械・航空工学科を卒業した後、同専攻の博士課程前期・後期課程を修了し、平成 30 年に博士号を取得いたしました。

博士課程では、「サイズ排除型分離チップを用いた大分子量 DNA の高速分離解析に関する研究」に従事しました。微細加工技術を用いて微小流路内にマイクロスケールのユニークな構造をもつチップデバイスを作製し、DNA 分子を高速かつ高精度に分離解析することに成功しました。現在は、ナノメートルの隙間内に閉じ込められた DNA 1 分子の挙動に着目しています。DNA 分子は高分子であり、そのサイズよりも小さなナノメートルの隙間内では興味深い変形挙動を示します。その挙動をナノスケールの構造をもつチップデバイスと蛍光顕微鏡による直接観察によって解明することを目指しています。将来的には、ナノ隙間内の“潤滑分子”の挙動を解析することで、様々な潤滑メカニズムを解明し、福澤研究室の研究分野であるナノトライボロジーの発展に貢献したいと考えています。

私は、幼少の時から愛知県で過ごしており、名古屋大学に憧れを持っておりました。そんな名古屋大学での研究生活は大変刺激的であり、多くの経験や知見を得ることができました。今後は、その恩返しとして、名古屋大学の教育研究活動の発展に貢献できるよう、日々精進いたします。今後ともご指導・ご鞭撻くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

名古屋大学大学院工学研究科
機械システム工学専攻

酒井 康彦 教授

昭和 53 年卒業(第 37 回)



私は昭和 53 年（1978 年）に機械学科（古屋善正研究室：流体機械講座）を卒業いたしました。時が経つのは早いもので、東山会の会員になってから 40 年の歳月が流れたこととなります。機械学科卒業後は大学院（当時は機械工学・機械工学第二専攻）博士前期課程、後期課程と進学し、その後、縁があつて昭和 58 年 4 月にそのまま工学部の助手にさせていただきました。とはいっても学位取得には至らず、単位取得退学という状態でまだまだ修行が足りないといった感じでした。工学部に所属したのは 1 年間のみで、2 年目に当時の教養部図学教室に配置換えになり、その後 4 年半、図学・製図教育に携わりました。当時の図学教室には田嶋太郎教授、峯村吉泰助教授、横沢肇助教授、三矢保永助教授がおられましたが、特に田嶋先生のコンピュータ図学へのご研究の情熱・バイタリティーに圧倒された記憶があります。教養部に移った当時は、工学部での学位取得のための研究が最終段階に入っており、悪戦苦闘してようやく学位論文を書きあげ、学位取得ができたのが昭和 59 年 11 月で、大学院退学後 1 年半を要しました。学位論文研究は古屋先生の研究室を引き継いでおられました中村育雄先生のご指導の下に、水力実験室（機械学科実験棟）にて進めさせていただきました。その後、教養部にて講師に昇任させていただき、しばらく教養教育に従事しておりましたが、昭和 63 年（1988 年）4 月に工学部にもどり、それ以来中村研究室にて機械系の教育・研究に携わりました。そして、時代は平成に移り、工学部・工学研究科は幾度かの改組がありましたが、中村先生のしっかりしたご指導のもとで一貫して流体工学研究に取り組むことができたことは望外の幸せでした。特に、この時代で私の研究人生で大きな出来事がありました。それは英国ケンブリッジ大学応用数学および理論物理学科（Department of Applied Mathematics & Theoretical Physics : DAMTP）への留学でした。平成元年（1989 年）8 月に妻と 0 歳の長女をつれて英国に渡りましたが、慣れない外国生活の経験もさることながら、おそらく当時流体力学（特に乱流分野）の中心拠点とだれもが認める DAMTP にて、Dr. J. C. R. Hunt（後年、英国王立協会フェロー就任、ケンブリッジ大学教授、英国気象庁長官、

ロンドン大学教授、英国上院議員を歴任し、現在 Baron Hunt of Chesterton として英国貴族に列せられております) の研究グループで研究生活を送ることが出来たことは、その後の私の人生に決定的な影響を与えました。DAMTP での研究生活はじつは Hunt 先生は超多忙で、あまりデスカッションできなかつたのですが、むしろ Hunt グループのポストドクであった Dr. Richard Perkins (現フランスリヨン大学教授)、大学院学生の J.C.H. Fung さん (現香港科技大学教授)、J.C. Vassilicos さん (現英国インペリアルカレッジ教授) といった若手研究者や学生諸君との交流が実に楽しく、深く流体力学の勉強に役に立ちました。DAMTP への留学は平成 2 年 (1990 年) 11 月まで続きましたが、その後、DAMTP で学位取得後ポストドクをしていた J.C. Vassilicos さんの招きで、再度平成 6 年 (1994 年) 10 月から平成 7 年 (1995 年) 3 月末まで DAMTP で共同研究をさせていただきました。今度は単身赴任でした。この 2 度にわたる DAMTP で得た知友はその後の私の人生にとって大きな財産となりました。平成 13 年 (2001 年) 4 月より中村研究室を引き継ぐ立場となり、現在に至っておりますが、私の教育研究の基盤はやはり中村先生とともに過ごした時代ですすでに確立していたように思います。

さて、いま私は東山会への会員便りを執筆していますが、私の手元に 3 冊の本があります。そのうち 2 冊は古屋先生が名古屋大学から離れるときにサインを頂いた古屋先生ご自身の著書「流体力学 I、II」(共立出版)であり、もう 1 冊は中村先生から頂いた「知的人生に贈る、どう生きるかを考える書」(田中菊雄著、渡部昇一特別解説、三笠書房)です。これらの書物は、私のこの 40 年間にわたる名古屋大学での教育研究の精神的基盤となっているものです。古屋先生のサインは、ただ一行「酒井康彦君の一そうの発展を祈って、53.3.1 古屋善正」であります。いまでも時々この本を開くことがあります。その都度、古屋先生の優しいまなざしが思い出されて、また頑張らねばと心を振るい立たせています。中村先生から頂いた「知的人生に贈る、どう生きるかを考える書」には多くの人生訓が記載されており、研究室の若い先生方や学生諸君にも事あるごとにこの本を読むことを勧めております。昨年度 (平成 29 年度) の東山会会報の副会長挨拶でも記載させて頂きましたが、日本民族の特徴は、「恩誼を知る」ことであるといわれております (新渡戸稲造「自警録」第十八章)。私の人生を顧みるとき、いまの自分はひとえに古屋先生や中村先生を始め、数多くの恩師、先輩、同僚、後輩の方々そしてなによりも家族の支えがあつてのことと思います。あらためて深い感謝の念を懐く次第でございます。東山会は名古屋大学機械系の卒業生の集まりであります。同窓の繋がりからいただける「恩誼」は会員の皆様にとってもなによりの財産ではないでしょうか。

最後になりますが、東山会同窓会の皆様のご幸福を願いつつ、東山会のご発展を切にお祈り申し上げて拙文の筆をおかせていただきます。

三菱重工業株式会社
防衛・宇宙セグメント
宇宙事業部 品質保証部

水野 努

昭和 63 年卒業(第47回)



平成 2 年に名古屋大学院修士課程を修了後、三菱重工業㈱に就職しました。会社では宇宙・航空・防衛製品の品質保証関係の業務を約 28 年間行っており、宇宙関係では H-IIA ロケット、H-IIB ロケット、宇宙ステーション補給機 HTV などを担当、航空関係では民間航空機に搭載するジェットエンジンの部品製作やメンテナンス作業を担当、防衛関係では戦闘機やヘリコプター用油圧機器やトランスミッションなどの機器関連を担当しました。

現在は、宇宙事業部に所属し、次世代の H3 ロケット/宇宙ステーション補給機 HTV-X の開発、宇宙実験装置、衛星関連機器と幅広く宇宙製品に関わる仕事をしています。

東山会の企業幹事を平成 22 年から平成 25 年の 4 年間担当しました。その頃、何度も名古屋大学キャンパスを訪れておりました。名古屋大学も自分たちが通っていた頃とは大分風景が変わっておりました。大学当時は地下鉄本山駅から徒歩で通っていましたが、現在は名古屋大学前に地下鉄駅がありとても便利になりました。キャンパスの建物もノーベル賞を受賞した先生の名前を記した、赤崎記念研究会や野依記念学術交流館などの立派な建物が軒並み建ち、名古屋大学の学術研究の成果が世界で認められていることを感じたものでした。一方、変わっていないところもありました。名古屋大学の象徴的な建物である豊田講堂の堂々とした雰囲気やグリーンベルトの緑の綺麗さは以前のままでした。

東山会のイベントとして東山会総会が隔年で 1 月に開催されます。私も、これまで何回も参加しました。様々な分野でご活躍されている著名な方の特別講演では貴重な話を聞くことができます。また、懇親会では大学でお世話になった先生との再会、先輩・同期との当時の話題に花が咲き楽しむことができるイベントです。今後も、参加していきたいと思えます。

最後に、これからも長い歴史と伝統のある名古屋大学東山会が更に発展していくことを願っています。

名古屋大学大学院工学研究科
エネルギー理工学専攻

辻 義之 教授

昭和 63 年卒業(第 47 回)



名古屋大学機械工学科を卒業して 30 年余りがたちました。今はその断片的な記憶しか残っていませんが、しばしその思い出にふけてみたいと思います。私たちの学年は、工学部 3 号館の北館と南館をつなぐ 321 号室で学部の講義を受けたと記憶しています。学部の講義は 1, 2 年生の一般教養の講義と異なり、専門の先生方がご自身で書かれた教科書を使って講義をされ、専門用語は英語で書かれていたことが、とても驚きでした。講義中は私語をする学生はほとんどなく、まじめに講義を聴いているか熟睡していたかでしょう。OHP を使われる先生もいましたが、黒板に板書され、私たちはノートに必死で書き写していました。3 年生のときに学科の研究室対抗ソフトボール大会がありました。機械科事務の女性の方に加わっていただいて、3 年生チームを作って参加しました。各研究室の教員職員の方々も参加されて、和気あいあいとして楽しい行事でした。3 年生の専門講義は難しく、講義数も多くありましたので、試験勉強が大変だったと記憶しています。また、毎週、学生実験がありました。内容は全く覚えていませんが、レポートが大変(苦痛)だったことは鮮明に記憶にあります。レポートはもちろん手書きでした。

学部 4 年生になると、各研究室に配属になりました。研究室を選ぶ際には、3 年生がみな集まり希望を黒板に書いて、人数が多い研究室はジャンケンで決めました。私はジャンケンをすることなく水力実験室に入ることができました。水力実験室は、工学部 2 号館の北側、工学部 7 号館の西側にあります。流体講座(中村育雄先生)と水力講座(菊山功嗣先生)の 2 つの講座が建屋の南半分、熱・伝熱講座が北半分に入っていました。ここで過ごした数年間は、数限りない思い出があります。総勢 30 名ほどの小さなコミュニティですが、各人が部屋と机をあてがわれ、研究テーマを与えられたことは新鮮な感覚でした。スマホもインターネットも発達していませんでしたから、何をするでもなく研究室に入り浸って、

論文を読んだり、疲れるとマンガを読んで、毎日を過ごしていました。何時から何時まで研究室に来るよという規則もなく、夜中にひよっりとやって来る者もいました。ゆっくりと、でも少しだけ充実した時間が流れていた思いがあります。

水力実験室の2階にはちょっとしたスペースがあり、卓球台が置かれていました。夕食後の気晴らしに、2人で卓球をはじめると、3人4人と2階に集まり、あっという間に20人以上の卓球大会が始まりました。気が付くと、夜12時近くになり、急いで帰宅の準備を始めることもしばしばでした。当時は、大学のゲートが12時に閉まりましたので、車で来ている学生が多かったため、急いで大学を出ました。夏の暑いさなかには、山の上のグラウンドで研究室対抗の野球大会がありました。水力・流体チームは、なぜか団結力があり、勢いだけで毎年トーナメントを勝ち上がったものでした。今でも機械科では野球大会はあるのでしょうか？

学部を卒業した後に、修士、博士と進みました。博士課程に進むときには、やりたいことをしてみようと将来のことは漠然としか考えていませんでした。紆余曲折はありましたが、幸いにも名古屋大学工学研究科のエネルギー理工学専攻にポストを得ることができました。研究室は水力実験室から山手四谷通を横切って農学部のあるキャンパスの端っこ（工学部6号館）にあります。農学部横の道を歩くと鶏の鳴き声が聞こえてきたり、実習農場がひろがり、桑畑が一面にありました。新しい環境に移ってから20年余りが過ぎました。その間に名古屋大学のキャンパスは、耐震改修も含め新しい建物が建ち一新しました。地下鉄名古屋大学駅（学生当時はありませんでしたが）を降りると、高層の建屋が立ち並びます。名古屋大学を世界に知らしめたのは、ノーベル賞の受賞で、そのミュージアムもつくられました。久しぶりに大学を訪れた方は、その変化に驚かれることと思います。

大学の中は、いつの時代もそうなのでしょうが、環境の変化が絶えません。じっくりと腰を落ち着けて基礎研究に取り組めるという姿勢は、名古屋大学工学部からもなくなりつつあると感じています。私たちの学生時代と比べてしまうからでしょうか、いまの学生さんたちの雰囲気も生活も大きく変わっていると感じます。講義をしていると、帽子をかぶって聞いている人、ご飯を食べ忘れたのでしょうかパンをかじっている人もいました。私の講義では、昔ながらにひたすらホワイトボードに板書をしますが、スマホで写真を撮るカシャという音がよく聞こえてきます。最近では講義のアンケートがあり、学生さんが教員を評価するシステムが欧米に倣って導入されています。教員も手を抜いて講義できないという状況です。キャンパスの中にはお洒落なレストランやカフェができて、図書館にはスタバコーヒーが入りました。図書館の中では自由に議論できるスペースもあり、講義で使ったこともあります。よい環境になったと思います。キャンパスを歩いていると、留学生の姿が目立つようになりました。9月から始まる学期もあり、英語での講義もふえました。私たちの機械科クラスには、タイからシヤイナポン・デーシャさんが留学されていました。当時は留学生の数も少なく、彼は間違いなくエリートで、一生懸命に勉強をしていた姿が忘れられません。彼にはいつか再会をしてみたいですし、彼の国の留学生とぜひ学んでみたいと思ってい

ます。

水力実験室で共に過ごした仲間たちとは、いまでも年に一回会う機会があります。いつも幹事を引き受けてくれる信州大学の吉田君のおかげです。その会合は「大遊会」といって、勉強をあまりしなかった私たちにはよくあったネーミングです。皆さん白髪交じりのおじさんになりましたが、会えば心だけは若いころに戻り、水力実験室で過ごした日々を楽しく思い出しています。当時の職員だった朝倉さんも毎年参加されて(たぶん、一番お元気で)、いっそう会話がはずみます。最後まで開発が残された水力実験室と工学部7号館地区も数年のうちには取り壊されて、高層化した建物が作られると聞きました。卒業後、東山会には参加することはありませんでしたが、平成26年の新年同窓会に初めて参加しました。新美研究科長(当時)のご挨拶と乾杯の音頭で和やかに始まったこと、懐かしい方々と再会できたことがまだ記憶に新しいです。これからも東山会が末永く引き継がれていくことを卒業生の一人として願っております。



昨年度の大遊会：山梨県笛吹川温泉 別邸 坐忘

岡山大学大学院自然科学研究科

松野隆幸 准教授

平成6年卒業(第53回)



私は、平成6年3月に機械・航空工学科を卒業後、平成16年9月に名古屋大学大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻博士課程を満期退学、同年10月からマイクロ・ナノシステム工学専攻に助手として1年半勤務いたしました。その後富山県立大学に異動し、現在は岡山大学大学院自然科学研究科に准教授として着任しております。

博士課程ではロボットによる柔軟物体のハンドリングをテーマに研究をおこなっておりまして、ハードウェアもソフトウェアも自分で考えることに大変苦労した記憶があります。今はロボットの開発ソフトウェアが整えられていて敷居が下がり大変良い時代になったと思います。また博士課程では指導教員の福田敏男先生の代理でJAXAの有識者会議に出席するという貴重な体験をしました。虎ノ門で行われた会議では戦々恐々としていた記憶があります。

現在の主な活動は、Interventional Radiology (IVR:画像下治療) 手術支援ロボットを岡山大学医学部と医工連携で開発を進めております。名称は Zerobot で、放射線科医のCT装置により被爆を抑制するために、医師の遠隔操作で患者の体表から深部に針を穿刺するロボットです。針穿刺によって取り出した腫瘍の病理検査などを行うことができます。Zerobot は独自に開発した6軸マニピュレータであり、現在の臨床機で3代目です。2018年6月6日に国内初の臨床試験をおこない、これまでに10例実施しました。博士課程で養ったロボット工学の知識を活用できていることを実感しております。

学会で先輩後輩の皆さまとお会いする機会があり、博士を多数輩出した福田研究室のOBの恩恵に授かっています。最後に私の恩師である福田敏男先生がIEEE President (米国電気電子学会 会長) に当選されました。誠にありがとうございます。

名古屋大学大学院工学研究科
マイクロ・ナノ機械理工学専攻
マイクロ・ナノ機械科学講座
生産プロセス工学研究グループ

村島 基之 助教

平成 20 年卒業(第 67 回)



私は博士前期課程、後期課程ともに名古屋大学・工学研究科・機械理工学専攻で学び、現在は改組後のマイクロ・ナノ機械理工学専攻で助教をしております。学部時代の4年間も含めると11年以上名古屋大学で生活していることになり、人生の1/3以上を過ごしていることになりました。大学の教員、特に助教という学生と関わる立場にいますと、自分の学生時代と大きく変わった点が沢山見えてきます。

個人的に不思議に思っている最近の流行は、筋トレとロードバイクブームです。私の学生時代には部活を行っている一部の男子が山の上のトレーニングルームを使用しているイメージでしたが、最近は、スポーツを行っていない学生も多数日々のトレーニングに励んでいます。トレーニング後にはプロテイン欠かさず摂取する徹底ぶりです。10万円を超える高級ロードバイクの所有率も非常に高く、2号館の前にはスタンドが付いていないロードバイク用の駐輪スペースまで設けられました。奨学金の問題などがマスコミで取りざたされることもありますが、一方で裕福な学生も多数いるようです。どちらもアメリカのブームが日本に上陸したように感じますが、あそこまで熱中できるものなのかと日々不思議に感じる次第です。

学生の私生活では、インスタグラム(インスタ)・ツイッター・Line・Youtubeが欠かせない存在となっているようで、常に様々な情報と接しているのが現状です。個人的には無価値なやり取り等がほとんどで時間の無駄に思いますが、たまに貴重な最新情報(大学構内でボヤが現在進行形で起こっているなど)を教えてくれる場合があり、でその活用方法次第では侮れないツールだとも教えられる日々です。

個人的に非常に危惧しているのは、パソコンに弱い学生が増えている点です。最近の報道では、フォルダやセーブファイルといった概念を知らない大学生が増

えているとされています。さすがにそのレベルの学生を名古屋大学で見ることがありませんが、Windows でいえば、コントロールパネル・コマンドプロンプト・レジストリ・強制終了など私の学生時代は知っていたであろう基礎知識を全く知らない学生がほとんどです。また、OS や基本ソフトウェア (Microsoft Office 等) のショートカットを全く知らないのにも衝撃を覚えます。私が中学、高校生の時代の OS・ハードウェアは非常に脆弱で何とかパソコンをフリーズさせないためにあらゆる設定をいじって最適化・高速化させたものです。現在の比較的安定した OS や十分なハードウェア性能の影響で、自分でシステムを設定するという発想がない学生がほとんどです。スマートフォンの普及によるパソコンとの触れ合いの減少もそれを加速させている一因だと思います。明らかに昔と比べてパソコンの操作速度が遅くなっており、社会で活躍する際に生産性が上がらない大きなボトルネックになるのではないかと危惧しています。

今回の便りでは、助教として働く立場から最近の学生の様子の一部を紹介させていただきました。大学は最高学府であり、そこを卒業した学生はすぐに社会で活躍することを求められます。今後も研究だけではなく学生の教育を通じて社会に貢献していきたいです。

名古屋大学大学院工学研究科
マイクロ・ナノ機械理工学専攻
マイクロ・ナノシステム講座
知能ロボット学研究グループ

長谷川 泰久 教授

平成 6 年卒業(第 53 回)



平成 30 年 1 月 27 日(土)、名鉄ニューグランドホテルに於いて、平成 30 年東山会総会・特別講演会ならびに恒例の第 15 回新年同窓会が開催されました。総勢 130 名の同窓生、恩師および現役教員に御参集頂き、盛会のうちに終えることができました。皆様の御厚情に対しまして、御礼申し上げます。

総会では、土屋総二郎会長のご挨拶の後、庶務・会計及び会計監査報告がなされ、内容が承認されました。その後、機械・航空宇宙工学科学科長 酒井康彦教授より平成 29 年に行われました改組を含む大学の近況について紹介を頂きました。特別講演は、トヨタ自動車株式会社副社長 吉田守孝氏(トヨタ自動車名大会会長・昭和 55 年卒 39 回生)より、現在、百年に 1 度の大変革時代を迎えている自動車業界について「自動車の変革と未来」という題名にて約 1 時間大変興味深い御講演を賜るとともに、質疑にも大変丁寧に応じて頂きました(写真 1)。ここに記して、厚く御礼を申し上げます。

新年同窓会は、特別講演終了後、場所を変えて、昭和 59 年卒 43 回生 粥川宏理事の司会進行のもと挙行政致しました。土屋会長より挨拶を頂いた後、東山会副会長 酒井康彦教授からお世話になった恩師の先生方をご紹介いただき、代表として平成 28 年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された山口勝美先生からご挨拶をいただきました。また、杉田雄二 前会長からは乾杯のご発声をいただき、宴が始まりました。今回の同窓会では、機械システム工学専攻・松本健郎教授によるフルート演奏が、スイス連邦工科大学からの留学生さんのピアノ伴奏のもと行われ、和やかな雰囲気を出して頂きました(写真 2)。

その後、恩師、先輩、後輩、同僚ならびに教員間で楽しく歓談頂き、学生時代の思い出話などで、花を咲かせて頂いておりました(写真 3、4)。また、卒業年順に 3 グループに別れて記念写真撮影も、前回同様、実施させて頂きました。なお、撮影致しました写真に関しましては、東山会のホームページにてご覧頂けます。

すので、どうぞ以下の URL にお立ち寄り下さい。

<http://www.higashiyamakai.com/photo/photo-top.htm>

新年同窓会の余興として、これも恒例になっておりますが、昭和 40 年卒・藤田訓弘前関東支部長の音頭による寮歌および応援歌を皆様で声高らかに御斉唱頂きました。また、最後に、昭和 53 年卒・酒井康彦副会長から中締めのお挨拶も頂きました。

最後になりましたが、当該企画の事務作業一切を切り盛りして頂きました東山会秘書・伊藤恵子様、理事一同、ここに記して、感謝の意を表させていただきます。



写真 1 吉田守孝氏による特別講演の様子



写真 2 松本健郎教授によるフルート演奏（ピアノ伴奏は、スイス連邦工科大学ローザンヌ校からの留学生 Nadim Ammoury さん）



写真3 御歓談の様子（その1）



写真4 御歓談の様子（その2）



OBの先生方

第 18 回 東山会イブニングサロン開催報告

名古屋大学大学院工学研究科
機械システム工学専攻
機械知能学講座
支援ロボティクス研究グループ

山田 陽滋 教授



第 18 回東山会イブニングサロン開催報告

平成 29 年 12 月 14 日（木）18：30～20：00、同日開催されました平成 29 年度第 3 回の東山会理事会に合わせ、名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリー 3F のベンチャーホールにおいて、第 18 回イブニングサロンを開催いたしました。東山会理事様方からのご推薦に基づき、当日は、講演 1 としてキャリアオ技研株式会社代表取締役の富田 茂氏（平成 3 年卒）氏を、また、講演 2 として三菱自動車工業株式会社 EV・パワートレイン技術開発本部本部長補佐の久米建夫氏をそれぞれお招きし、日本機械学会東海支部との共催のもと、盛況裏にご講演をいただくことができました。

まず講演 1 では、富田 茂氏に、「無人飛行ロボット（SARA-Search And Rescue Aircraft-）を活用した取り組み」と題して、以下の内容のご講演をいただきました：当初は、有害鳥獣対策として追立実験から始まったという、いわゆるドローンと呼び親しまれている無人飛行ロボット利活用への取り組みを種々ご紹介いただきました。シカの追立て実験、イノシシの威嚇やゴルフ場におけるカラスの定期駆除等の試みについて、いずれも鳥獣との知恵比べは大変難しいとして種々の試みを苦労話と共にご紹介いただきました。また、無人飛行ロボットで捉えた映像による電気柵の点検や、駆除した鳥獣の食材化まで、予防活動から資源再利用まで、広範囲にわたるこれまであまり知られていない取り組みの数々を、ドキュメンタリー番組を見るような動画とともに、興味深くご講話いただきました。

ご講演の後半は、愛知県主催の「無人飛行ロボット実証プロジェクト」への参加をきっかけに、リスクアセスメントをはじめとする安全確保のための技術に対して、業界の中でもとりわけ高い意識をもって取り組んでいるというお話しや、無人飛行ロボットで利用可能な周波数帯と出力の制限下では、受信距離が短いという実用化に向けた規制等現状の課題への言及もありました。

つづいて質疑のコーナーでは、「(有害鳥獣を) 追い立てるだけで精一杯か」の

問いに対して、「静的 (static) には、ゲートに追い込んで捕獲するほか、動的 (dynamic) なわなとして、イノシシの足にギブスのような杭を打ち込むことにより、その運動能力を衰えさせて追跡、捕獲しやすくする方法もある。」との紹介がなされました。つぎに、「中国での開発が進んでいると聞くが、特許取得状況はどうか」の質問に対しては、「もともと、無人飛行ロボット開発は軍事利用から始まっているが、今後は、民間利用をターゲットとした特許技術の開発競争に日本も参戦して拍車がかかる」とのことでした。さらに、「岐阜 (大垣市) で最近 (=2017年 10月) 発生したドローン墜落による人身事故について、なぜ事故が発生したか?」と問われました。これには、「事故内容から推察して、リスクを予知し事故の発生を未然に回避するための企業側の努力が不足していたと考えられる」と明快に答えられました。最後に、今後の活動の展開方向性に関する問いに対して、「火事が起きたときに、いち早く現場に向かい、空から外観を映像で捉え発信する等、緊急性の高い要求に応えられるドローン技術の開発、産業の開拓を目指したいと意気込みをもってご講演を締めくくられました。



キャリオ (株) 代表取締役
富田 茂氏 (平成3年卒)



無人飛行ロボット
(SARA-Search And Rescue Aircraft-)

つぎの講演2では、久米建夫氏に、「昨今の自動車電動化と今後の課題」と題して、以下の内容のご講演をいただきました：三菱自動車の環境・エネルギー問題へのそれまでの長年の取り組みが、他社に先駆けて同社が電気自動車 (EV) を商業化した背景としてあるとして、排ガス対策、米国燃料規制の推移、技術的な自動車エネルギーの多様化が、プラグインハイブリッド車、電気自動車の開発を後押ししたとのご説明がありました。そして、三菱自動車の電気自動車 (i-MiEV) のご紹介をいただきました。最大出力 47kW という同期型モータを後輪の中央に搭

載していること、1日走行距離の需要調査から180kmの後続距離が確保できれば、また、通常充電の400倍に相当する充電時間30分の急速充電が可能となれば、80～90%程度の顧客用途に応えられるとする要求仕様の統計的な裏付けにも言及されていました。

しかしながら、電気自動車ではまだ航続距離、充電時間、価格について課題が残っているとして、プラグインハイブリッド進化型自動車（PHEV-SUV）のご紹介がありました。単にEV車として、そしてエンジンで発電・モーターで走行というシリーズハイブリッド車として、さらにエンジンで走行しながらモーターでアシストするというパラレルハイブリッド車としてそれぞれ走行できることが紹介されました。

今後は、振興国でも燃費・CO₂の規制が課せられる等、グローバルな温暖化対策がさらに電気自動車をはじめとする次世代自動車の技術競争を加速させるであろう、また、2030年に燃料電池車が市場に出始めるまでの間はEVとPHEVが並存するとの予想を述べられました。メーカーの目指す電動化技術開発の方向性である、環境性能向上やコストダウンに加え、グローバルには顧客の需要が航続距離400kmに延びてきているとする課題にも触れていただきました。最後に、三菱自動車のスマート社会におけるインフラ化実験 M-tec Labo をご紹介いただき、「交通システムやエネルギー供給のためのインフラ変革が伴って、電動化社会が実現される」という将来予想とともに講演を閉じられました。

質疑の時間帯では、まず、電池スワップ（電池ごと交換する）に関して会場からご質問があり、電池の搭載性あるいは直列接続だと特性のばらつきを伴う等の問題があるが、将来的に規格化が進めば、乾電池化やモジュール交換は考えられるかもしれないと回答をされました。つぎに、電気エネルギーを生成する上で、2050年に80%のCO₂削減が求められていることもあり、電力供給の観点でバッテリーにかかる開発の比重はいかばかりか？との質問に対し、充電率や電池の寿命・劣化によって出力が変わる本質的な問題があり、その克服に開発コストを要すると予想するが、それがいくらというより環境規制が開発の方向性を変えると意味で、より大きな影響を持つでしょうと説明されました。日産も既存エンジンを使ったシリーズハイブリッド車が好評だが、これらの技術課題は何か、また、三菱、日産のグループ会社としてのシナジー効果を問う質問に対しては、CO₂の排出量低減や効率の低下抑制を進める必要があること、そして合弁会社では、供給の直轄化、リース簡素化を進める等、PHEV、e-POWERの強みを生かしながらリスクを抑えつつリターンを最大化する等の特長が期待とともに紹介されました。

さらに、Tesla Motors や中国からの非自動車メーカーの脅威に質問は及びましたが、今後は、安全面でも技術開発の競争軸が生まれるでしょう、また、充電方式は、日本のChademoに対し、EUはComboですが、これらが統合されるかは不明との答えでした。バッテリーは、寒冷地で効率が低下する問題については、-40℃にもなると放電容量が無視できなくなり、温めて特性を上げるのが現状のソリューションとのことでした。最後に、航続距離に関する現状についてコメントを求められたのに対し、長距離を乗り継いだ人が（なかなか）いないので顧客の実際の要求は不明であるが、冬季の暖房等が影響して航続距離が短くなることもある

ので、航続距離が短いなら所用する充電時間も短くなくてはならない、つまり充電の一層の急速化が要求されるでしょうとご回答をされていました。



三菱自動車工業（株）

EV・パワートレイン技術開発本部 本部長補佐

久米 建夫 氏

今回の第18回イブニングサロンの講演2題については、ドローンの場合は市場開拓に向けた利活用が、また電気自動車の場合は環境規制や社会インフラに係る電気エネルギーの効率的な供給・利用が、それぞれ開発競争の主題になっていることがよく理解されました。いずれも社会的な関心の非常に高い話題で興味深く、あっという間の1時間半になりました。



東山会会長 土屋総二郎氏による挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
マイクロ・ナノ機械理工学専攻
マイクロ・ナノシステム講座
マイクロ・ナノプロセス工学研究グループ

秦 誠一 教授



7号館地区再開発の進捗状況報告

名古屋大学では、老朽化著しい7号館を中心とした地区の再開発を進めています。2016年に名古屋大学地域連携グローバル人材育成拠点施設として概算要求を行い、2017年の予算内定を受けて、東山キャンパス7号館地区再開発整備事業計画を2017年11月に策定しました。2018年には全学および工学部にて7号館地区再開発ワーキンググループ（WG）を結成し、小職は工学部施設・図書委員会委員長として、工学部WGの主査を拝命し、現7号館居住者の移転交渉、新7号館入居者の決定とその配置計画、さらには外部資金による研究スペース拡充のために、近隣企業への説明とお願いに奔走する日々です。新7号館は、PFI（Private Finance Initiative）事業として進められ、一定の外部資金と収益施設（コンビニエンスストアなど）により、民間資金とノウハウを導入しての整備となります。現行の7号館は2020年8月に取り壊しを開始し、新7号館は2023年3月に竣工予定です。

具体的な新7号館の姿は、まだ計画途中ですが、新7号館は地下1階地上3階の低層棟の上に4階から10階程度までの高層棟を有し、向かいのIB電子情報館と同規模の建物となる予定です。さらにその北側、四谷山手グリーンロードに面した場所に新北部生協が建設予定です。新7号館の東側、地下鉄3番入口側には、オークマ株式会社様のご寄附により、2019年度竣工予定のオークマ工作機械工学館が建設されます。周辺の再開発としては、新7号館完成後に、現7号館同様、老朽化の著しい機械学科実験棟や、実験実習工場棟を取り壊し、将来のさらなる再開発のためのスペース確保を行います。

新7号館には、実験実習工場の機能に加え、創造工学センターとその工作室の機能を集約化し、オークマ工作機械工学会館の最新の工作機械とも連携し、ものづくりの見せる実験実習工場を目指します。ここでは、高度創造工学実験やフォーミュラ、鳥人間コンテストなど、大学の授業のみならず、学生のものづくりを支援します。同じく低層棟には機械航空系の酒井研究室、成瀬研究室およびマイ

クロ・ナノ機械理工学専攻の各研究室と、その実験室が入居し、同じく入居する物質科学専攻と共に、学科、専攻の壁を超えて共創し、地域とも連携した新しい人材育成を目指します。講義室も、将来の改組や学生減少などを見据えて、なるべく大型の講義室となるスペースを確保し、可働壁により中小の講義スペースに柔軟に分割、変更できる計画です。その他、寄附施設としてホールなど福利厚生施設、産学連携のレンタル研究スペースも設けられます。

新7号館をすばらしい建物とするべく、今後も様々な交渉や計画を進めて参ります。一方で、大学への運営交付金が毎年削減され、建物が建設されても引越しを初め、その後の運用の資金も心もとない状況です。持続可能で後世に禍根を残さぬ再開発とするために、会員の皆様におかれては、大学への国策に対する世論喚起や、名古屋大学工学部・工学研究科支援基金 (NUDF-e) へのご協力など、様々なレベルでの一層のご支援を心からお願い申し上げます。



現在の7号館



7号館地区再開発計画

掲載原稿募集(同期会等の報告)

今後、卒業年次ごとに開催された同期会、講座ごとに開催されたOB会などの情報を掲載したいと考えます。会の幹事の方には下記の情報を東山会事務局までお寄せいただきますようお願いいたします。なお、掲載内容について事務局からご確認させていただく場合がありますことをあらかじめご了解願います。

1. ○○年卒業同期会、あるいは「会の名称」
2. 日時、場所、参加者数
3. 集合写真
4. コメント（200字程度）